



顔ニモマケズ

水野敬也著

見た目こそ人生取り戻す力

表紙を手に取り、ハッとする。顔が左右対称でなかったり、鼻と口の間が変形していたり、見慣れない顔に思わず身構えてしまう。これは心して向き合わなければならぬ本なのかと。そんな「普通」の顔をもつこちらの狭い了見を、心地よく崩してくれるあたたかな書だ。

「人は見た目が9割」という新書がヒットしたが、本書は「見た目」の圧倒的部分を構成する△顔▽に、病による症状をもつ9人のインタビューで構成される。バストアップのカラー写真がまず読者を出迎え、「見た目」に症状を抱えた、主人公一人一人の人生に出会っていく。それぞれの病名も多彩だ。リンパ管腫、動静脈奇形、口唇口蓋裂、アルビノ等々。

評 黒川祥子

(ノンフィクションライター)

幼い頃に「変な顔」「宇宙人みたい」と揶揄されたという、トリーチャーコリンズ症候群の青年の顔が目飛び込んできた時、愕然としたことを告白する。彼は十分にわかっている。

「僕のような外見を見てびっくりするのは、ある意味、自然なことだと思っんですよ。僕自身も、自分の顔を鏡で見たとき



みすの・けいや 著書に「夢をかなえるゾウ」などのほか、作画・鉄拳の作品に「それでも僕は夢を見る」など

気分が沈むことがあります」

誰もがお決まりのようにいじめに遭い、自己を否定し般に閉じこもりと心底まで落ちていく。そして「顔」症状は変えられないという厳然たる宿命からスタートするのだ。人生を自分の手に取り戻す「旅」に。

「顔の傷は、エネルギーの源。同時に、他者とながりがやすくなるための『ネタ』」と、それぞれの語りは明るくユーモラスだ。「『なんやかんやで、ロンバーク病でよかつたな』と思っで死んでいければいい」、「今の自分になるために、この顔の症状が必要とされるなら、それはあつてよかつた」と、カメラの前でこやかに笑う一人一人が何と魅力的なことだろう。

「異形」の顔に身構えた自分とは、跡形もなく消えていた。主人公たちの堂々たる笑顔がたまらなくチャーミングで、大きな勇氣と人生のエネルギーというバトンを胸にしっかりと受け取っていた。